

## 藤原道兼とその周辺

——『拾遺和歌集』前夜における歌人の動静をめぐって——

徳 植 俊 之

粟田関白藤原道兼の名は、花山天皇退位事件に際して兼家の右腕となつて働いたこと、兄道隆の死後、ようやく手に入れた関白の座に就くもわずか十日余で急逝し、七日関白と呼ばれたことなどで知られている。父兼家、兄道隆、弟道長という頂点に昇りつめた者たち

の間にあつて、政治史の上ではいささか印象の薄い存在であるが、文学史の面でも、蜻蛉日記の作者を妻とし、『拾遺集』以下勅撰集に十六首の歌が入集した兼家や、歌合等も主催し、『拾遺集』以下勅撰集に四十三首の歌が入集した道長に比べると、文学史上、藤原道兼の名が注目されることはほとんどなかったと言えよう。

実際、道兼の和歌は、勅撰集では『拾遺集』と『続古今集』にそれぞれ一首ずつとられているにすぎず、そのほか『道信集』に一首見られるほかは、ほとんど残されていない。

しかし、道兼に文芸趣味の存した痕跡は、古記録類や諸家集等から拾い上げることができ、そのみならず、道兼の周辺には多くの歌人たちが出入りしていた形跡も認められるのである。本稿は、そ

れらの点を具体的に検証し、道兼と歌人たちとの交流の実態を明らかにすることで、『拾遺和歌集』前夜における歌人の動静の一端について考察しようとするものである。

### 一 道兼と歌人との交流

道兼と関係の深かつた歌人としては、まず藤原相如の名が指摘できよう。『笨花物語』「みはてぬゆめ（巻第四）」によれば、相如は道兼を「いみじきものに頼みきこえさせつる者」と仰ぎ、道兼もしばしば相如邸を訪れていたようである。相如は、道兼が亡くなるや、自身も病の床に臥し、後を追うように亡くなったと『笨花物語』は伝えているが、実際、道兼の死を悼む歌が『相如集』には残されている。

二条殿うせたまひて、あはれかぎりなしかし

夢ならでまたもみるべき君ならばねられぬいをも嘆かざらまし

(相如集六五)

このほか、『大鏡』『道兼伝』にも、道兼に関白の宣旨が下ったことを喜ぶ相如像が描かれるなど、道兼と相如との間には、強固な主従関係の存したことが知られるのである。

この相如の子女を妻にした源兼澄もまた、道兼と深く関わった歌人の一人である。『兼澄集』には、年内立春の年に道兼が兼澄に詠ませた梅花の歌が残されている。

粟田のおとどまだ弁にておはせしときに、ふる年に節分のはじめにて侍りし日、梅の花をよませたりしに  
枝わけてにほひやすらん梅の花年のうちなる春のしるしは

(兼澄集四六)

『兼澄集』では、この歌に続き、七夕の日に道兼が人々に歌を詠ませた際の兼澄詠も残されている。

同じおとど蔵人の弁にておはせしころ、七月七日同じおとどさきのね本ノマ、さらにありきとある題をよませたまひしに

たなばたの秋をしもなど契りけむ雲の上みる人にとはばや

(兼澄集四七)

興味深いのは、『元輔集』にも、やはり道兼邸で催された七夕の歌会の折に詠まれたと思われる歌が存する点である。

七月七日、道兼が家に、たなばた秋をこすといふ題を、人々よみはべりしに

たなばたにとふよしもな天の川けふを契りていくよすぎぬと

(元輔集一七〇)

この歌が『兼澄集』四七と同じ歌会の詠であるかは確証がないが、別度の詠であるとしても、道兼が、七夕の日にしかるべき歌人たちを集め、歌会を催していたという事実は、道兼と歌人たちとの交流の実相を伝えるものとして注目されよう。

さて、以上の例では、いずれも道兼が歌人たちに和歌を所望しているが、こうした例はほかにも見られる。

粟田の右大臣の、弁に侍りしとき、念仏し侍りし、世尊  
慧灯明といふことをよめとはべりしかば、夏のことには  
べり

ななへなる卯月のかげもくからず夏の夜ふかき法の光に

(能宣集三〇一)

この『能宣集』の場合では、「世尊慧灯明といふことをよめとはべりしかば」とあるように、道兼が大中能宣に和歌を詠ませている。また、『仲文集』の一首、

東三条院にて、粟田大将、仲春花如雪といふ題をよませ  
給ひけるに、仲文

降り紛ふ花か雪かとたどる間にわがよのいたくふけにけるかな

(仲文集三一)

からも、道兼が自ら歌題を出し、その題で和歌を詠ませていることが知られる。こうした事実の背景には、道兼自身が和歌に深く傾倒していたということがあったものと考えられるのである。

ところで、次にあげるのは『小石記』永祚元年(九八九)二月三

日条である。

三日、甲寅、参内、摂政被命云、以権大納言藤原朝臣道隆、可任内大臣、其日可擇申事可仰大納言者、即於左仗仰権大納言、令申恐奉之由、即申摂政、小選参院、奏摂政之被申旨、晚景罷出、深更從権中納言（道兼）御許有御消息、仍着直衣参詣、有作文・和歌等、雲上侍臣多以会合、

（傍線及び括弧は筆者による）  
この記事によれば、兄道隆が内大臣に内定した日の夜、道兼は自邸に殿上人たちを集め、作文・和歌の会を主催している。

また、『大鏡』「道兼伝」では、関白の座を道隆に譲った父兼家を恨んで、道兼が亡き父の服喪中もまったくその死を嘆かなかつたと伝える逸話の中で、「さるべき人々呼び集めて、後撰・古今ひろげて、興言し、遊びて、つゆ嘆かせたまはざりけり。」という状態であったと語られている。この記事からも、道兼が「さるべき人々」を集めて歌会のようなものを催していたことが想像されるのである。

このように、道兼が折に触れ歌人に和歌を詠ませ、また歌会等を主催していた事実は、家集・古記録等に散見されるのである。道兼と交流の存した歌人には、このほか公任・実方・道信・為頼らの名もあげることができる。公任らとの交流については後述することにし、ここでは道兼周辺に、多くの歌人たちが出入りしていた事実を確認しておきたい。

ところで、こうした道兼と歌人たちとの交流は、かなり早い時期

から存したようである。『能宣集』の詞書には、「粟田の右大臣の、弁に侍りしとき、夏のことにはべり」とあるが、道兼は、永観二年（九八四）十月三十日に左少弁に任じられ、寛和二年（九八六）七月十六日に右中将に任じられるまでその任に就いており（『蔵人補任』）、これは道兼二十五・二十六歳の夏のことであったこととなる。

また、『兼澄集』四六の詞書でも、「粟田のおとどまだ弁にておはせしときに、ふる年に節分のはじめにて侍りし日」とあり、やはり道兼の弁官時代の詠であったことが知られる。その間年内立春があったのは、寛和元年（立春は十二月十九日）であったことがすでに指摘されており（『源兼澄集全釈』春秋会、風間書房）、これは道兼二十五歳のことであったと推定されるのである。<sup>3)</sup>『兼澄集』四七についても、道兼「蔵人の弁」時代の七月七日が、寛和元年のみであったことが『源兼澄集全釈』（春秋会、風間書房）に指摘されている。

このように、道兼は折に触れ歌人たちに和歌を所望したり、自ら歌会を主催したりするなど、積極的に多くの歌人たちと交流を結んでいたためであり、そうした和歌への傾倒は、二十代より見られたことが確認されるのである。

## 二 詠歌の場としての粟田山荘

ところで、道兼と歌人たちとの交流で重要なのは、粟田山荘の存

在である。『栄花物語』「さまざまのよろこび」(巻第三)の記事によれば、道兼は正暦元年(九九〇)に粟田に山荘を造営するが、その山荘において詠まれた和歌が、家集等に多く残されているのである。たとえば、『道信集』には、

粟田殿に、十二月つこもりがたに参りたるに、かはらけ  
とりて

春立たば花咲く山に遠からぬ君が宿にをまつはきてみむ

(道信集一九)

と、山荘での宴席において詠んだと推定される歌があり、ほかに『実方集』『公任集』にはそれぞれ、

おなじころ、粟田殿にて

この春はいざ山ざとにすぐしてむ花の都はをるにつゆけし

(実方集二八)

粟田に人人おはして思ふ心よむに

うき世をば峰の霞やへだつらんほ山ざとは住みよかりけり

(公任集二二)

といった歌が残されている。実方詠は、円融院崩御の年の春に詠まれた歌で、『公任集』の一首もそれと同時期の詠であるとする竹鼻績氏の指摘もある。

また、『兼澄集』にも、粟田山荘に同行した折に詠んだ歌がある。

三月つこもりに、あはたの殿に、大将殿のおはしましし  
御ともにつかまつりて

山里に見にこそきつれ君とを遅れてにほふ花はありやと

(兼澄集八四)

道信・実方・公任、そして兼澄らは、いずれも道兼との関わりが深かった者たちである。山荘が、彼ら道兼周辺歌人たちの集う場としての機能を果たしていたことは、これらの家集の和歌から容易に想像されよう。

そもそも、粟田山荘は風雅の贅を尽くした別荘であったことが、『栄花物語』「さまざまのよろこび」(巻第三)より知られる。

かやうのことにつけても、大納言殿(道兼)はいとらやましう、女君のおはせぬことを思さるべし。粟田といふ所にいみじうをかき殿をえもいはず仕立てて、そこに通はせたまひて、御障子の絵には名ある所々をかかせたまひて、さべき人々に歌詠ませたまふ。世の中の絵物語は書き集めさせたまひ、女房、数も知らず集めさせたまひて、ただあらしことをのみいそぎ思したるも、をかしく見たてまつる。

(傍線及び括弧は筆者による)

この記事によれば、粟田山荘の障子絵に名所絵が描かれ、その絵柄に合わせてしかるべき歌人たちに歌を詠ませたとあるが、これもまた道兼と歌人との接点を示すものとして注目される。問題は「さべき人々」が具体的に誰かという点であるが、『拾遺集』には惠慶と平祐挙の山荘障子絵歌が残され、また熊本守雄氏によって『惠慶集』に「或所の御屏風の歌」とする一八三から一九五番歌が、この粟田山荘の障子絵歌であったことが指摘されており、少なくとも惠慶と平祐挙がその和歌を詠進したことが確認される。さらに、この

障子絵には漢詩も添えられていたことが『江吏部集』から知られ、これらの事実から、道兼と惠慶・平祐季・大江匡衡らの当代歌人・文人たちとの接点が見られるのである。この『栄花物語』の記事では、「世の中の絵物語は書き集めさせたまひ」とある点も、道兼と文芸との関わりを示す例として注目される。

粟田山荘は、『栄花物語』で、いづれ己の姫君を教養豊かに養育するための下準備として造営されたと伝えられるほどの風雅の贅を尽くした山荘であり、そこに歌人たちが集いサロンを形成していた可能性は十分考えられる。しかし、それはまた、道兼が早くから和歌に傾倒していたことも作用していたであろう。道兼邸や粟田山荘が歌人の集う場を形成していった背景には、道兼自身に文芸に対する深い関心の存したことが、大きく関与していたと考えられるのである。

### 三 道兼と花山院歌壇

ところで、粟田山荘に出入りしていた歌人たちのうち、実方・公任・道信らは、いずれも花山院歌壇の歌人たちである。また、花山院歌壇の歌人としては、為頼もまた道兼と交渉の存した可能性がある。次にあげる『為頼集』の歌の詞書から、道兼家の女房と関係の存したことが知られ、為頼は日頃より道兼邸に出入りしていたものと想像されるのである。<sup>(8)</sup>

右大臣殿の女房、里へ出でんとて車かる、貸すとて

まだしらぬ恋ひの山路に惑ふかな里へも誘ふ人もあらなん

(為頼集六八)

このように、道兼の周辺には、花山院歌壇の歌人たちも集っていたことが確認できるのであるが、道兼は、寛和二年(九八六)の花山院退位事件を表で取り仕切った人物である。とするなら、道兼周辺に、花山院歌壇の歌人たちが集っていたという事実をどう解釈したらよいのであろうか。

そもそも、彼らが道兼と交渉を持ち始めたのは、いつごろからであったのだろうか。実方・公任・道信の場合は、粟田に山荘が造営された正暦元年(九九〇)には、交渉が存した可能性が高い。つまり、花山院退位からさほど年月の経過していない時期に、これらの歌人たちと道兼との間には交渉が存したことになる。このことをどう考えたらよいのであろうか。

この問題に関連して一点注目されるのは、次にあげる『道信集』の一首である。

三条左大臣殿にて、春夜、雨のうちに梅の花を見る、といふことを

にほふなる花のしづくにそほつとも露なれにたる袖にうつさむ

(道信集六二)

問題となるのは詞書の「三条左大臣」である。この本文は榊原本のものだが、書陵部蔵甲本では「二条右大将」とあり、従来の研究ではこれを「二条右大将」の誤写と見て、道兼をあてていた(安藤太郎氏「道信集作歌年次考」『平安時代私家集歌人の研究』所収)。

その主たる根拠としては、「三条左大臣」と呼称されうる人物が、道信在世中には見当たらないことと、道信と関係の深かった人物としてはまずは道兼の名が指摘できるという二点があげられている。しかし、榊原本・甲本いずれも「左」とする点は一致しており、甲本の「二条左大将」をはじめから誤写と見るのはいささか早急であろう。ここは再検討の余地があるかと思われる。

道信在世中の左大将には、朝光・道隆・濟時の三人がいる。このうち注目されるのは道隆である。道隆は『尊卑分脈』によれば、「二条」と号したとある。これはおそらく、道隆が左京三条三坊八町に「二条第」を設けていたことによる呼称であろう。とすれば、道隆が「二条左大将」と呼称された可能性は十分考えられるのである。道隆が左大将の任に就いていたのは、永祚元年（九八九）七月十三日より正暦元年（九九〇）五月八日までのことであった。したがって、道信がこの一首を詠んだのも、その間のことであったと推定されるが、さらに想像をたくましくすれば、歌題が「梅花」を取り上げていることから、正暦元年の春の詠であった蓋然性が高いように思われる。

道隆が左大将を勤めていた時期は、兼家の後継者の地位をめぐる、道隆と道兼との間に微妙な空気が流れていた時期である。その時期に、道信は、道隆のもとで和歌を詠み、それからさほど隔たらない時期に粟田の山荘にも顔を出しているのである。こうした事実、当時の歌人たちが、ある歌壇の中に拘束されていたのではなく、かなり自由に交流していたことを示唆しているのではないだろう。

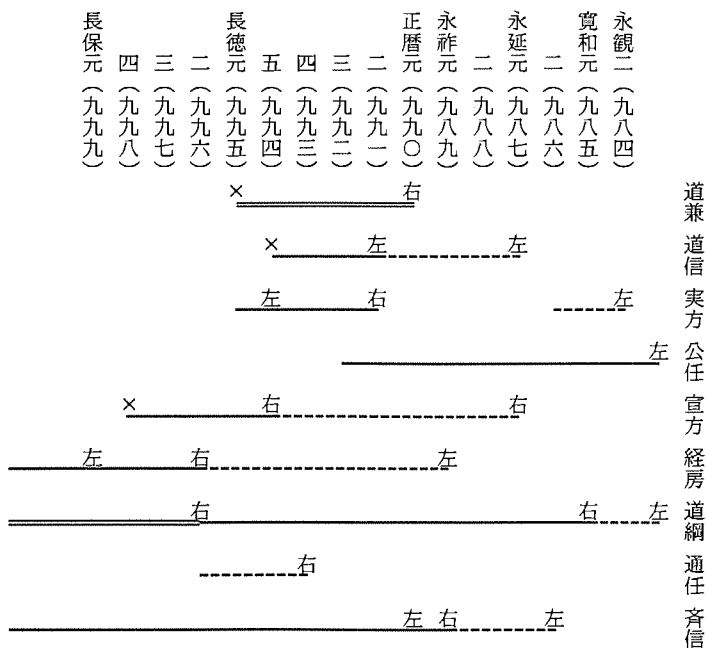
か。では、そうした自由な交流を生み出した場、当時の歌人たちを結び付けた接点には、どのようなものが存したのであるか。

#### 四 近衛府の歌人たち

道兼周辺歌人のうち、道信・実方・公任の交友圏を見てゆくと、そこにはある共通の接点が見出される。彼らの交友関係を各々の家集等から拾い上げてゆくと、例えば、道信と交友関係にあった主な人物としては、藤原実方・藤原公任・源宣方らがあり、また、実方の交友圏には、公任・宣方ら以外に、源経房・藤原道綱・藤原通任らの名をあげることができる。公任の場合は、実方・道信のほか、藤原齊信とも交流の存したことが知られる。これらの人物たちに共通する接点とは何であろうか。それはいずれも近衛府の武官を経験しているという点である。今試みに、これらの人物が近衛府の武官を勤めていた時期を一覧してみると、次の表1のようになる。

この表1でもっとも注目されるのは、ここにあげたいずれの人物も、道兼が右大将を勤めていた正暦年間に近衛府の武官を勤めていたという点である。道兼は正暦元年（九九〇）六月一日に右大将となり、その後関白職に就く長徳元年（九九五）四月二十七日までその任を勤めることになる。この事実、道兼の周辺歌人たちを結び付けた要素の一つとして、近衛府という場が関与していた可能性を窺わせるものである。

〈表1〉



\*大将 —— 中将 —— 少将 - - - - - × 即世

さらに、そのことを裏付ける証左として、『小右記』正暦四年二月六日条をあげたい。この日道兼は、実資・道綱を誘って粟田山莊に赴き、多くの公卿たちとともに射・競馬等を楽しんでいる。

早朝内相府(道兼)被寄御車、同車向宰相中将(道綱)家門、同被招乗、被向粟田、公卿多會、或射、或不以厩馬被競、又晚頭左右相分、上達部・殿上人射、前勝、募以小帖、以馬為懸物、即察前庭樹、藤宰相中将(公任)、又少納言実成同中、仍共不得、其後近衛府官人等射之、三度了、入夜各々分散、藤宰相同車帰家、

注目されるのは傍線部で、道綱・公任などを含めた近衛府の官人たちが参会している点である。

冷泉・円融朝あたりから近衛府の性格が変質し始めていたと指摘するのは笹山晴生氏である。近衛府の本来持っていた軍事的側面は形骸化し、貴族の出世コースの一過程と自らその地位を落とす代わりに、定員枠を増加させ肥大化していったのがこの時期である。近衛府にもつばら求められていたのは、行事等の使者を勤め、舞人として奉仕することであった。しかし、そうした役割の変質が、実方のような風流で雅な才能を必要とさせ、近衛府の中に、華やかで風雅な文化的雰囲気を横溢させる結果をもたらしたとも言えるのである。平安時代中期以降の近衛府の武官たちにとっては、行事等に供奉することがその職掌の中心であり、自ずと舞・吟詠・作詩・作歌など、文化面の素養が求められていくことになる。そうした環境は、彼らの文芸面における資質を磨かせることにもなったであろう。ま

た、宮中での宿直を初め、集団として行動する機会が多く存したことも、彼らの結びつきをより強固なものとし、和歌を詠み合う場を提供することにもなり、自然と作歌の場が形成されていったと考えられるのである。

道兼とその周辺歌人との関わりをめぐっては、近衛府の介在以外にも様々な要因が考えられよう。例えば、公任の場合、道兼の養女（昭平親王の娘）を北の方に迎えており、そうした姻戚関係も関与していたであろう。これは、道兼北の方の姉妹である藤原遠度の娘を妻に迎えていた道信の場合も同様である。そうした姻戚関係の背景には、政界での派閥抗争も関わっていた可能性は高い。本稿は、そうした政治的な派閥と歌壇の動向との関わりを、否定しようと言うのではない。当時の歌壇の動向は混沌としており、政界での派閥だけでは説明の付かない要素を、当時の歌人圏は有していたことをまずは確認したいのである。そして、その混沌とした状況の背景の一つとして、近衛府の存在が介在していた可能性を指摘したいのである。

## 五 結 語

以上、従来和歌史の上ではほとんど注目されることのなかった藤原道兼に着目することで、彼が『拾遺集』前夜の歌壇において、庇護者としての役割を果たしていた可能性を指摘した。道兼にはもともと文芸を愛好する一面があり、そうした文芸趣味が、道兼周辺に多く

の歌人たちを集わせる一因となったのではないとも考えられる。また、道兼の存在に注目することで、『拾遺集』前夜の歌人の動静に、政治的な派閥だけでは説明の付かない動きのあることも明らかになった。これらの歌人たちを結び付けていた要素の一つとして、近衛府という場も考えるべきであろうと思われる。

おそらく、当時の歌壇の動向は、かなり混沌とした状況であったろう。本稿は、道兼にスポットをあてることで、その一端を照らし出そうとしたものである。

### 〈注〉

(1) 福足といひ侍りける子の、やり水に菖蒲をうゑおきてな  
くなり侍りにける、のちの年おひいでて侍りけるを見侍  
りて 粟田右大臣

しのべとや菖蒲もしらぬ心にもながからぬよのうきにうゑけん  
朝顔の花につけてつかはしける 粟田白隠贈太政大臣  
朝顔のあしたの花の露よりもあはれはかなきよにもふるかな  
(続古今集・卷二十・哀傷・一二八一)

返し 源英明朝臣女  
(続古今集・卷十七・雑上・一五七六)

人のよか露かなにそと見し程におもなれにける朝顔の花

なお、『拾遺集』の一首は『玄玄集』では、「粟田殿の上」す  
なわち、道兼の北の方の詠となっており、不審の残るところで  
(続古今集・一五七七)



ある。『拾遺集』は道兼の死後そう隔たらないころに編纂されており、その点からすると、この一首は道兼本人の歌であった可能性が高いとみてよいのではないか。この一首は『拾遺抄』には見えない。

(2) 春日の使にて内大殿より

おぼつかなきみかさの山の春霞いかがちちてし見てもつげなん

(道信集六)

返し

いはねどもみかさの山の春霞たなびくかたは心あるらし

(道信集七)

(3) この歌は、道兼蔵人頭時代の詠とする本文(群書類従本・谷森本等)もあるが、道兼が蔵人頭に任じられるのは、寛和二年(九八六)六月二十三日で、その年の七月二十日には参議に任じられ、蔵人頭を降りている(『公卿補任』)。したがって、梅の花の季節には、蔵人頭を勤めていないといった問題が残る。

(4) 「藤原公任の研究―公任集作歌年次考―」(山梨県立女子短期大学紀要4、昭和四十五年三月)

(5) 二条右大臣の粟田の山ざとの障子のゑに、たび人もみちのしたにやどりたる所 惠慶法師

今よりは紅葉のもとにやどりせじをしむに旅の日かずへぬべし

(拾遺集・秋・二〇四)

粟田右大臣家の障子に、唐崎に祓したる所にあみひくかたかける所 平祐挙

みそぎするけふ唐崎におろす網は神のうけひくしるしなりけり

(拾遺集・神楽歌・五九五)

(6) 『惠慶集 校本と研究』(桜楓社)。なお、『惠慶集』の歌番号のみ、熊本氏の論考にあわせ、私家集大成による。なお、熊本氏は『惠慶集』一三二から一三七番歌も、一八三から一九五番歌までの障子絵と同じ絵柄を詠んだとされるが、和歌の内容と絵柄とをつきあわせると必ずしも一致せず、仮に粟田山荘の障子絵を詠んだ歌としても、両者は別の絵柄を詠んだものと考ええるべきであろうと思われる。

(7) 「絵物語」に関しては、最近伊東祐子氏によって、そのもつとも有力な読者が、「幼い、あるいは少女期の姫君たちであった」ことが明らかにされているが、この指摘は『柴花物語』に「ただあらましことをのみいそぎ思したる」と語られている点とも符合する。ただし、それが「あらましこと」であったとすれば、「絵物語」を書き集めさせたのは、単なる慰めものだけではなく、姫君の教養を培わせる教材としての意味もあったと思われる。「物語文学史再考―「絵物語」をめぐる―」(中古文学第六十四号・平成十一年十一月)

(8) 『為頼集』には、もう一首次の歌が見られる。  
故粟田の右大臣殿の、はかなくなりたまひての年の十月に

神な月いつもしぐれは悲しきをここひの森もいが見るらん

(為頼集六〇)

ただし、この歌は次にあげるように『清少納言集』にも見え、『為頼集』とは詠歌事情が異なっている。

右大将殿のこなくなしたまへるが、かへりたまふに

神無月もみち葉いづもかなしきをこひの森はいかがみらん

(清少納言集二八)

返し、実方の君

いつとなく時雨ふりしく袂にはめづらしげなき神無月かな

(清少納言集二九)

さらに、『清少納言集』二九は、『実方集』にも見え、これらの歌の詠歌事情をめぐっては、諸歌集間でかなり混乱している実態が窺われる。

十月つこもりがたに、信方の中將に

いつとなく時雨ふりぬる袂にはめづらしげなき神無月かな

(実方集四八)

対の御かたの少納言ききて

大空のしぐるるだにもかなしきにながめてふる袂そは

(実方集四九)

この点に関しては、様々な推定がなされ、いまだ結論が出ていない。本稿では、為頼と道兼との交渉を伝える歌である可能性もあるものとして、注において指摘しておく。なお、『為頼集』の詞書からは道兼の死後の詠となるが、和歌中に「子恋の森」が詠み込まれているなどことから、この歌が為頼詠であるとする、道兼の長男福足君が亡くなった年の詠であった可能

性も考えられる。『為頼集』は、この歌を十月の詠と記すが、その点に着目すると、福足君は、永祚元年(九八九)八月十三日に腫れ物を患って亡くなっており(『小右記』)、その四十九日は十月一日であったことになる。とすると、この歌は福足君の死に伴う法要が一通り済んだ際に、為頼が道兼の心情を察して詠んだ歌であった可能性も考えられる。

萩谷朴氏『清少納言全歌集』(笠間書院)、田坂憲二氏『神無月いつも時雨は』考―源氏物語引歌瞥見―(『文芸と思想』五七・平成五年一月)、竹鼻績氏『実方集注釈』(貴重本刊行会)、『為頼集全釈』(風間書房)

(9) 『日本古代衛府制度の研究』(東京大学出版会)二七二頁。

(10) 『栄花物語』「みはてぬゆめ」では、道信は道兼の養子になつたとある。『日本紀略』によれば、道信は兼家の養子になつており、『栄花物語』の記述には問題が存するが、仮に誤りであるとしても、二人の間にはそのように語られてもおかしくない関係が存したと推定することはできよう。

\*なお、和歌本文及び歌番号は『新編国歌大観』に、そのほかの本文は、以下の諸書によつた。『栄花物語』『大鏡』(新編日本古典文学全集、小学館)、『近衛府補任』『威人補任』『弁官補任』(続群書類従完成会)、『尊卑分脈』(吉川弘文館)。

(とくうえ・としゆき/東京学芸大学連合大学院博士課程)